

令和 7 年 2025 年						
日	月	火	水	木	金	土
					1 先勝 八朔 とら	2 友引 う
3 先負 たつ	4 仏滅 み	5 大安 三りんぼう 一粒万倍日 うま	6 赤口 ひつじ	7 先勝 立秋 さる	8 友引 とり	9 先負 いぬ
10 仏滅 三りんぼう る	11 大安 山の日 一粒万倍日 ね	12 赤口 うし	13 先勝 とら	14 友引 う	15 先負 たつ	16 仏滅 み
17 大安 うま	18 赤口 ひつじ	19 先勝 さる	20 友引 とり	21 先負 いぬ	22 仏滅 三りんぼう る	23 先勝 処暑 一粒万倍日 ね
24 友引 うし	25 先負 とら	26 仏滅 う	27 大安 たつ	28 赤口 み	29 先勝 うま	30 友引 ひつじ
31 先負 二百十日 さる						

葉月

〔はづき〕令和 7 年 8 月
「月見草」「観月」「桂月」とも言われ、古くから月に生えていると信じられていた桂の葉の月という意味があります。
発行：北海道神社庁一區教化委員会

ふりつもる み雪にたえて 色かへぬ
待つぞをしき 人もかくあれ
昭和天皇御製

今月のことば

ふりつもる み雪にたえて 色かへぬ
待つぞをしき 人もかくあれ
昭和天皇御製
終戦の翌年（昭和二十一年）「松上雪」と題して詠まれた御製。
このみ歌は終戦によって国土も民心も無惨に打ちひしがれていた国民を励まされた尊いみ心のこもったみ歌である。
「ふりつもる雪」は戦時中に積り積もった色々の苦勞を表現したものであり、そして終戦によって、初めて国民が体験した「敗戦」という大きなショックに耐え抜こうとする国民を「たへて色かへぬ松」として、励まされておられる。陛下こそ、かくの如き敗戦という一大悲劇に遭遇され、国民の悲痛を一身に背負って、最も悲痛な御ときだったに違いない。
（神道百言 一般財団法人神道文化会編より抜粋）

七十二候《8月》

処暑	立秋
初候・綿柎開（わたのはなしへひらく） 綿の実を包む花の萼（がく）が開き始める 次候・天地始肅（てんちはじめてさむし） ようやく暑さが弱まりはじめる 末候・禾乃登（こくものすなわちみのる） 日に日に稲穂の先が重くなってくる	初候・涼風至（すずかぜいたる） 秋の涼しい風に変わりはじめる 次候・寒蟬鳴（ひぐらしなく） 夏の終わりを告げるがきこえが弱くなる 末候・蒙霧昇降（もくうしやうかう） 深い霧がたちこめる

二十四節気

【立秋 りっしゅう】…七日
旧暦七月申の月の正節で、この日から暦の上では秋に入りますが、実際には残暑が厳しく、まだまだ暑い最中です。しかし朝夕は何となく秋の気配が感じられます。

【処暑 しよじよ】…二十三日
旧暦七月申の月の中気で、涼風が吹きわたる初秋のころで、暑さもおさまり、収穫の候も目前となります。

六曜・選日
《六曜》
【先勝】…諸事急ぐことによし、午後よりわるし
【友引】…朝夕よし、正午わるし、葬式を忌む
【先負】…諸事静かなることによし、午後大吉
【仏滅】…万事凶、患は長ひくおそれあり
【大安】…何事をするのにも吉の日、大吉日
【赤口】…諸事油断すべからず、正午のみ吉
《選日の吉凶》
【三りんぼう】…三隣亡日、普請始め、棟上大吉日
【一粒万倍日】…出資・投資・購入、新規事業開始、婚姻は吉、借りる、離別凶

安産祈願 8月の戌の日

9日（土）
21日（木）

*戌の日以外でも安産祈願のご奉仕をしております。神社にお問い合わせください。

《11日 山の日》
山に親しむ機会を得て、山の恩恵に感謝する日です。

祝祭日には国旗を掲げましょう

「暑中見舞い」贈答の習慣が簡略化

暑中見舞いはもともとお盆の贈答の習慣が簡略化されたものです。かつては、お盆に里帰りする際、祖先の霊に捧げるための物品を持参する習慣がありました。それが、しだいにお世話になった人全般への贈答の習慣になっていきました。

その際、本来は直接訪問して届けるのが一般的でしたが、やがて簡略化され、手紙ですませるようになったのが現在の暑中見舞いです。

暑中見舞いは、二十四節気の小暑（七月七日）から立秋（八月七日）にかけて送るのが通例で、立秋を過ぎたら「残暑見舞い」とします。

ちなみに、お盆の贈答の習慣は、お中元へと受け継がれています。

盆踊り歌とは？

ふるさとの盆踊り歌には、その土地に長い間歌い継がれたものが多くあります。その歌は、本来は盆を迎えた祖霊を慰め、またこれを送るためであったと考えられますが、今はその趣旨は精霊踊りや念仏踊りの歌にしか残っていません。多くは庶民の娯楽化した歌詞や、口説きの類で、踊る者と歌う者との交歓のためのものになっています。

歌舞は、元々鎮魂のための作法でした。盆踊りの輪踊りの形は櫓を中心としていますので、神楽や巫女舞の輪踊する所作と同じようなものといえると思います。盆踊りの人たちが恍惚となっていく様が示されています。

今の盆踊りは拡声器やテープの音量を上げて歌いますが、昔は野良や山で鍛えた野太い、よく透る声で歌われたと思います。その肉声こそが、ふるさとの『祭り広場』たる盆踊りの踊り手らの胸に沁み透ったに違いありません。

祖先崇拜

死者の霊が死後も存続する
という考えから、家族、民族の祖霊の霊を崇め祀ること。

あさがお 朝顔

盆踊りに戻った祖霊への供養

お盆の時期になると全国の至る所で盆踊りが行われます。もともとは、年に一度、文字通りお盆のときに、この世に戻ってきた祖霊を供養するために踊ることを意味します。

「盆踊り」は、古代日本で神様が降りてきたところを中心に、輪を作って踊ったなごりと言われていたのですが、鎌倉時代、時宗の開祖・一遍上人が広めた念仏踊りのように列を組んで歩きながら踊る「行列踊り」などもありました。

その代表的なものが「阿波踊り」です。

参考文献
『くらしと祭り百話』小野迪夫（神社新報社）